

No.35 スタシス・エイドリゲヴィチウス 「顔一車」

Stasys Eidrigėvičius

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 9月1日付 立川市市報記事より

スタシスは絵本をたくさん作っていて、その翻訳は日本でも出版されている。彼は多才な人で、芝居の舞台美術をやったかと思えば、今では役者も演出家もやっている。彼の作品の特徴はその仮面にある。仮面のなかにある人間の気持ちはわからない。そんな仮面の演ずる、置かれている状況によって見え方が変わってくるのだ。ファーレ立川の駐車場で仮面は車の帽子をかぶっている。車なしでは生きられない現代の人間そのものを表わしている道しるべとしてスタシスは今回の作品を作った。作家は旧リトアニアの作家で、今はポーランドのワルシャワに住んでいる。故郷を失った人間が作る仮面は底知れない訴えをしているようにも思える。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

昨年私は東京の新谷直恵さんから立川プロジェクトへの参加を要請されているとのメッセージを受け取りました。私は喜びと同時に責任を感じました。1993年12月アートフロントギャラリーの招きで私は東京立川を訪ね、私の作品が実現される場所を見ました。それはビルの近くで、図書館と駐車場の出入り口が連結する場所でした。私のプロジェクトのスケッチの中でアートフロントギャラリーのディレクター北川フラムさんの注意を引いたのは数点でした。話し合いの結果、“顔一車”プロジェクトがその場に最も適しているということになりました。私の創作において“顔”は特別の意味を持っています。大学を卒業する時(1973年)からですからかれこれ20年になります。“顔”にはグラフィックペインティング、石、木など様々な技法を使ったものがあります。“顔”の設置により周辺の空間は劇場化されます。この作品では20世紀、人間が車と共に成長をし続け車なしでは生活できないということを示すかのように、顔は車と一体になっています。人間と車は常に私の作品に登場します。ドローイングと仮面に最も頻繁に現れます。シカゴで“仮面一顔”を作っていますし(1986年より開始)、巨大な自転車の仮面も作りました。映画監督 A・パブジンスキは、スタシスによる7つの神秘の映画を作りました。映画は1995年5月に始まります。子供たちが私の仮面をつけ、生活し、遊ぶのです。そこにはリトアニア、ポーランドの何処での生活そして歴史が描かれています。立川プロジェクトの“顔一車”は一風変わった道標としてファンタジーの世界への入り口に人々を立ち止まらせることでしょう。